

子育て期における母親同士の友人グループの特徴と その関わり方との関連

大嶽 さと子

Relationship between Structure of Groups and Friendship among Child-rearing Mothers

Satoko OHTAKE

1. 問題と目的

現代の子育ては、少子化・核家族化が進んだ中で生まれ育ち、子どもを育てるという行為を生活の中でみることのないまま成人し、親となる者も多い。そのため、子育て期に育児不安に陥ることも少なからずあり、ストレスを抱えがちになることが指摘されている¹⁾。こうした問題への対処として、自治体などの主催により、各地で子育て支援が活発になりつつある。名古屋市においても、市内の保育所のうち58か所(2015年4月現在)が「子育て支援センター」と位置づけられ、様々な子育て支援事業を行っている。例えば、子育てに関する相談事業、保育所の施設開放や行事への招待、子育てに関するセミナーや講座の開催などにより、地域の子育て家庭を支援し、親子・子ども同士・親同士の交流の場を提供している²⁾。

こういった子育て支援の場をきっかけとして、母親同士が関係性を深めていくことがある。子どもを通じて知り合った母親同士を一般的に「ママ友」とよぶが、お互いに悩みを共有したり、相談したりすることで育児ストレスが解消されると考えられている³⁾。しかしながら一方では、ママ友との関わりがかえってストレスにつながることも指摘されており⁴⁾、一般的な友人関係と同様に、関係を形成・維持する中で、友人の存在がサポートとしてもストレスャーとしても機能していることが考えられる。

これまでの友人関係に関する研究は、主に児童期から青年期にかけての学校生活におけるものについて数多くなされてきた^{5) 6) 7)}。個人に着目したものもあれば⁸⁾、集団に着目した研究も数多くなされている⁹⁾。ママ友関係に関する研究も、個人に着目したものもあれば¹⁰⁾、ママ友が複数名集まって形成した「ママ友グループ」についても扱われるようになってきており¹¹⁾、ママ友関係に関わるトピックは多角的な視点で着目されつつあるといえる。たとえば「公園デビュー」¹²⁾は、公園に集まる既成のママ友グループが存在するがゆえに生まれた言葉である。ママ友グループに所属していない場合には、子どもを公園で遊ばせたいものの、その公園内でどのようにデビューするのか、つまりどのように仲間入りしていくのがよいのかというストレスを母親に生じさせる問題であるともいえよう。

それでは、ママ友グループはどのような特徴のママ友関係を形成し、どのような関わり方をしているのだろうか。本研究では、ママ友グループにおけるママ友関係にスポットをあて、その特徴と関わり方について検討する。なお本研究における「ママ友関係」とは、大嶽(2014)¹³⁾や宮木(2004)¹⁰⁾、實川(2000)¹¹⁾を参考に、「互いに育児に関わっている同性友人関係をさすが、母親同士の感情だけで友人関係の強弱を規定できるものではなく、母親とペアで関係を構築し

ている子ども同士の存在を介した間接的なもの。ただし子どもを産む以前に出会い、仲間となった者も含まれる」と定義することとする。

2. 方法

(1) 調査時期と調査対象者

2014年3～4月に質問紙調査を実施した。A県内で小学生以下の子どもを育てている母親205名から有効な回答を得た。回答者の年齢は、22歳から50歳であり、平均年齢は37.3歳 ($SD=5.05$) であった。

(2) 調査項目

①個人属性について

調査対象者の属性を把握するため、年齢、出身地、職業、家族形態、子どもの数、子どもの年齢・性別などを尋ねた。

②ママ友について

調査対象者のママ友について把握するため、ママ友の数、知り合ったきっかけを自由記述によって尋ねた。ママ友の数については、上述のママ友の定義を挙げた上で、現在何人いるかを明確な数字で回答するよう求めた。また、普段ママ友と子ども抜きで外出することはどのくらいあるかについて、「次の行動について、お子さん抜きで『ママ友』と外出することはどのくらいありますか。最もあてはまるもの1つに○をつけてください」とし、「1. 全然ない」から「4. よくある」の4件法で答えてもらった。挙げた行動は「ランチやお茶に行く」「買い物に行く」など8項目であった。

③ママ友グループの特徴

石田・丹村 (2012)¹⁴⁾ で作成された仲間集団の特徴尺度をもとに、今回の調査の目的や調査対象者の状況に合うように項目の表現を適宜加筆修正して作成したもので、18項目からなる。評定は、「1. まったくあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」の5件法であった。

④ママ友グループとの関わり方

石田・丹村 (2012)¹⁴⁾ で作成された仲間集団との関わり尺度をもとに、今回の調査の目的や調査対象者の状況に合うように項目の表現を適宜加筆修正した作成したもので、22項目からなる。評定は、「1. まったくあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」の5件法であった。

3. 結果

(1) 個人属性について

子どもの数の平均値は1.90人 ($SD=.80$)、第一子の平均年齢は7.55歳 ($SD=4.17$) であった。職業、出身地、家族形態についてはFigure1からFigure3に示す。職業については約30%が専業主婦であった。内閣府男女共同参画局が発表している共働き世帯数は全体の約70%とされていることから¹⁵⁾、今回の調査対象者はサンプルとしては偏りのないものであると思われた。出身地につ

いては約80%が調査を実施した県内あるいは隣接する県であり (Table1)、家族形態は約85%が核家族であった。現代の日本における核家族は全国平均で60%ほどと言われており¹⁶⁾、全国平均よりもやや高い数値であるといえる。このことは、今回の調査を実施した県は比較的規模の大きな都市を複数抱えていることが影響していると思われる。大都市に居住し身近に親類などもおらず、育児のアドバイスが容易に得られる状況とは言い難いという現状が推測された。

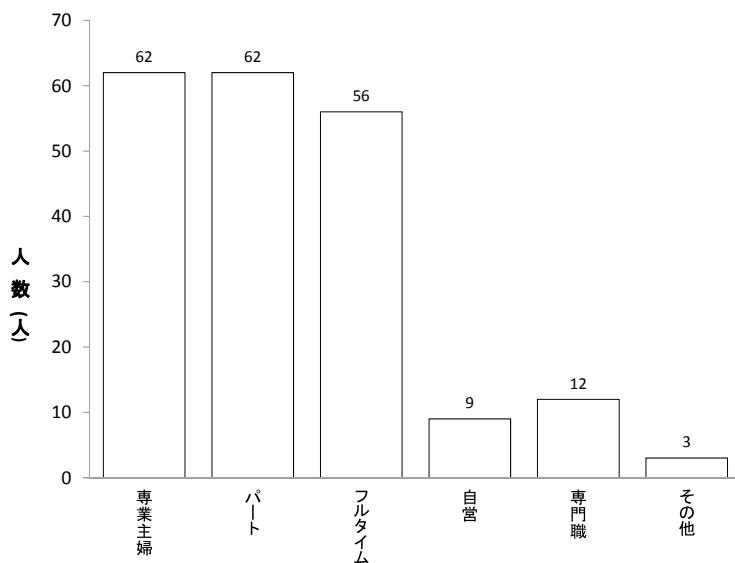


Figure1. 調査対象者の職業

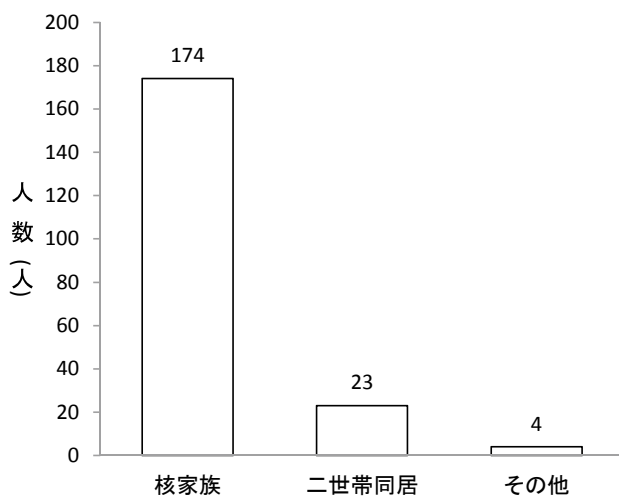


Figure2. 調査対象者の家族形態

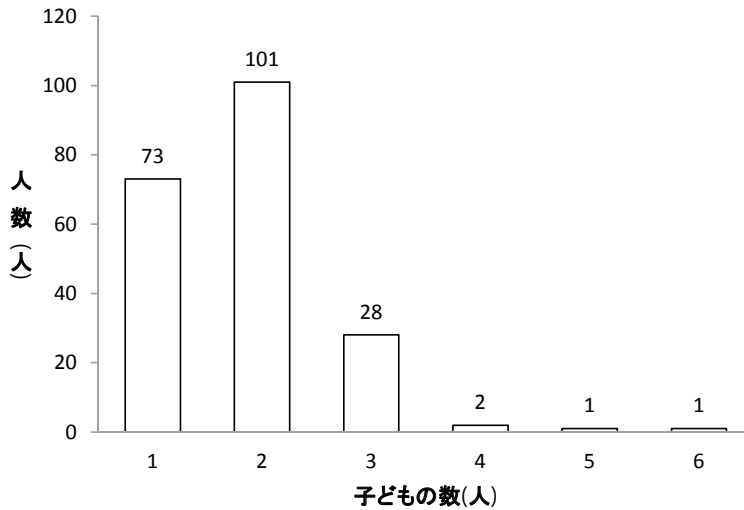


Figure3. 調査対象者が育てている子どもの数

Table 1. 調査対象者の出身地
(単位: 人)

A 県	132
A 県に隣接する県	31
それ以外の都道府県	42
合計	205

(2) ママ友について

①ママ友の数

ママ友の数の平均値は12.05人 ($SD=10.61$) であった。ママ友の数には個人差があり、複数の要因が影響していると考えられるが¹³⁾、中尾・原田 (2010)¹⁷⁾ では11.3人、宮木 (2010)¹⁰⁾ の9.2人とされており、今回の調査対象者の状況は、おおよそ一般的であると思われた。

②知り合ったきっかけ

ママ友と知り合ったきっかけとしては、「保育園や幼稚園が同じ」「子どもの習い事が同じ」「同じ子育てサークルに入っている」などが挙げられていた。また、「産院が同じ」「妊婦健診で知り合った」「プレママスクールで知り合った」など、子どもを出産する前から母親同士のみで関係を形成したものもみられた。

③ママ友だけの付き合い

子ども抜きで行うママ友との行動をFigure4に示す。ランチやお茶、買い物や飲み会といった比較的短時間でできるものに関しては「ときどきある」あるいは「よくある」という回答が得られたが、多くの行動においては子ども抜きでは行われなかったことがわかった。

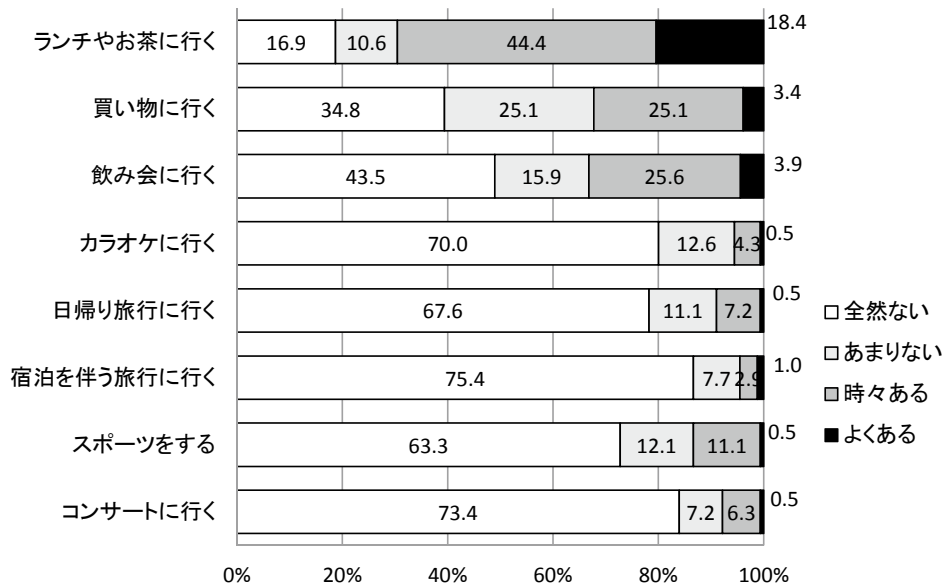


Figure4. 子ども抜きで行うママ友との行動 (%)

(3) ママ友グループの特徴とその関わり方

①尺度について

i) ママ友グループの特徴

Table2. ママ友グループの特徴尺度の因子分析結果

	I	II	III
I. 閉鎖性 ($\alpha=.83$)			
13 他の「ママ友」グループの人が自分の「ママ友」グループに入ってくることを嫌がる人がいる	.86	-.10	.14
10 自分の「ママ友」グループの人は、他の「ママ友」グループの人と仲良くしていない	.78	-.03	-.14
14 「ママ友」グループ内に上下関係がある	.77	.01	.03
7 「ママ友」グループ以外の人を仲間に入れてあげないという雰囲気がある	.47	.06	-.01
4 「ママ友」グループの人は、いつも「ママ友」グループの人とだけ関わっている	.47	.25	-.07
9 「ママ友」グループの中で孤立している人がいる	.45	.15	-.28
1 自分の「ママ友」グループには、「ママ友」以外の人を受け付けない雰囲気がある	.45	-.01	.01
II. 階層性 ($\alpha=.77$)			
5 「ママ友」グループの中に、みんなを引っ張っていく人がいる	-.12	.83	.28
2 「ママ友」グループには、中心的な存在がいる	-.09	.78	.10
8 「ママ友」グループで何かを決めるときは、提案する人がいつも決まっていて、みんなはそれに従っている	.16	.58	-.07
17 「ママ友」グループの中には、みんなについていくだけの人がいる	.35	.37	-.15
III. 親和性 ($\alpha=.69$)			
3 「ママ友」グループの団結力は強い	.28	.15	.61
18 「ママ友」グループのみんなで一緒に話したり、出かけたりすることが多い	.17	.07	.60
6 「ママ友」グループの中のみんなは仲が良い	-.22	-.06	.60
15 「ママ友」グループには、誰にも遠慮することなく、言いたいことを言える雰囲気がある	-.12	-.02	.44
16 「ママ友」グループ以外の人ともみんなよく関わっている	-.28	.13	.43
(残余項目)			
11 「ママ友」グループの中で、意見を言う人と言わない人とが分かれている	.33	.34	-.23
12 「ママ友」グループの友だちは特別であるという雰囲気がある	.57	-.11	.46
	因子間相関 I		.60
	II		-.08
			.13

ママ友グループの特徴尺度について最尤法による因子分析を実施した。固有値の減衰状況を見てみると、5.61、2.72、1.29、1.08、1.02、0.88、0.77…となっており、固有値の減衰状況と解釈のしやすさから3因子とした。プロマックス回転により得られた結果をTable2に示す。

複数の因子に絶対値で.35以上の因子負荷量をもつ項目を削除し、下位尺度を作成した。第1因子は、グループのメンバーだけで関わり、メンバー以外の人を仲間に入れられないという雰囲気があることを示す項目に負荷が高く、「閉鎖性」と命名した ($\alpha=.83$)。第2因子としては、グループ内にメンバーを引っ張っていく中心的な人物がいるという項目に負荷が高く、「階層性」と命名した ($\alpha=.77$)。第3因子としては、グループのメンバーと遠慮することなく言いたいことを言い合えるなど、グループのメンバーとの仲の良さに関する項目に負荷が高く、「親和性」と命名した ($\alpha=.69$)。先行研究^{14) 18)}とは下位尺度の名称が異なるものの、 α の値から、内的整合性は十分な値であると思われる。

ii) ママ友グループの関わり方

ママ友グループの関わり方尺度については最尤法による因子分析を実施した。固有値の減衰状況を見てみると、7.12、4.20、1.53、1.23、0.90、0.82…となっており、固有値の減衰状況と解釈のしやすさから4因子とした。プロマックス回転により得られた結果をTable3に示す。

Table3. ママ友グループの関わり方尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV
I. 評価懸念 ($\alpha=.85$)				
13 一人でいるのはなんだか心細い	.85	-.09	-.01	-.07
5 「ママ友」グループから仲間はずれにされるのは絶対に嫌だ	.73	.16	-.16	.03
4 自分が「ママ友」グループのみんなにどのように思われているか気になる	.68	.01	-.09	.20
9 誰かと一緒にいないと、周囲から浮いているように見られそうで不安だ	.67	-.05	.18	.04
22 あまりやりたくないことでも、「ママ友」グループのみんなに合わせようと思う	.50	-.04	.01	.28
II. 信頼安心 ($\alpha=.86$)				
7 「ママ友」グループのみんなには自分のありのままの姿を見せられる	-.16	.85	.03	.06
8 「ママ友」グループのみんなのことを信用している	.01	.85	-.01	-.18
6 「ママ友」グループの人になら、何でも打ち明けられる	-.08	.75	.08	.14
18 「ママ友」グループのみんなとならうまくやっているとと思う	.28	.62	-.19	.03
21 「ママ友」グループのみんなは、私になら何でも打ち明けてくれると思う	-.13	.58	-.00	.21
12 「ママ友」グループのみんなと意見が違っても、自分の意見を言える	-.06	.57	.14	-.26
14 「ママ友」グループのみんなは私を裏切らないと思う	.18	.51	-.21	.03
III. 拒否不安 ($\alpha=.86$)				
10 「ママ友」グループのみんなは、私とはあまり一緒にいたくないのではと感じる	.21	-.04	.77	-.18
19 「ママ友」グループのみんなの顔色ばかりうかがっている	-.03	-.01	.75	.23
15 「ママ友」グループのみんなから嫌われるのではないかと、ビクビクしている	.04	.03	.73	.14
11 自分が「ママ友」グループのみんなから嫌われていないか気になる	.52	.06	.58	-.24
17 「ママ友」グループのみんなと離れて一人でいたい	-.31	-.14	.49	.08
20 「ママ友」グループのみんなと意見を合わせようとしている	.23	-.04	.37	.28
IV. 同調志向 ($\alpha=.72$)				
2 「ママ友」グループのみんなと何でも同じでいたい	-.05	-.02	.13	.75
3 何をしても「ママ友」グループのみんなと一緒にだと安心する	.14	.11	.04	.62
(残余項目)				
16 「ママ友」グループのみんなと同じことをしたい	.15	.16	.42	.36
1 「ママ友」グループと違う行動や考えだと気になる	.36	-.18	-.05	.52
因子間相関 I		.19	.54	.51
II			-.15	.31
III				.44

複数の因子に絶対値で.35以上の因子負荷量をもつ項目を削除し、下位尺度を作成した。第1因子としては、1人でいることで周囲から浮いてしまうことに不安に感じたりながら関わっていることを表す項目に負荷が高く、「評価懸念」と命名した ($\alpha=.85$)。第2因子としては、

自分のありのままを見せて何でも本音で話し合い、グループのメンバーには絶対に裏切られないであろうという信頼感をもって関わっているという項目で負荷が高く、「信頼安心」と命名した ($\alpha=.86$)。第3因子としては、グループに所属していても、メンバーから嫌われるのではないかと顔色をうかがって関わっているという項目に負荷が高く、「拒否不安」と命名した ($\alpha=.69$)。第4因子としては、グループのメンバーと行動や考えが同じであるように関わっているという項目に負荷が高く、「同調志向」と命名した ($\alpha=.72$)。先行研究^{14) 18)}とは因子数も下位尺度の名称もともに異なるものの、 α の値から、内的整合性は十分な値であると思われた。

iii) ママ友グループの特徴とその関わり方との関連

個人属性とママ友グループの特徴とママ友グループとの関わり方との関連を相関係数により検討した (Table4)。

Table4. ママ友グループの特徴とその関わり方との相関

	関わり方				
	評価懸念	信頼安心	拒否不安	同調傾向	
子どもの数	.08	.20 *	-.03	-.05	
第一子の年齢	.06	.14 †	.00	.13	
母親の年齢	-.11	-.01	-.10	.06	
ママ友の数	.01	.17 *	-.03	.04	
特徴	閉鎖性	.31 **	-.20 **	.50 ***	.46 ***
	階層性	.36 **	-.06	.40 ***	.32 ***
	親和性	.22 **	.69 ***	.03	.28 ***

† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

個人属性に着目すると、子どもの数とママ友の数については信頼安心と正の相関がみられた (それぞれ $r=.20, p<.05$; $r=.17, p<.05$)。子どもの数やママ友の数が多い人ほど、ママ友を信頼し、安心感をもって関わっていることがわかった。また、第一子の年齢と信頼安心との間には、有意傾向ではあったものの、正の相関がみられ ($r=.14, p<.10$)、第一子の年齢が高いほど、ママ友グループと信頼感や安心感のある関わりをしていることが示された。

ママ友グループとの関わり方の下位因子である閉鎖性については、信頼安心との間に負の相関がみられ ($r=-.20, p<.01$)、拒否不安と同調志向との間には正の相関がみられた (それぞれ $r=.50, p<.001$; $r=.46, p<.001$)。グループ内の閉鎖性が高いほど、信頼安心が低く、拒否不安や同調志向の高い関わり方をしていることが示された。階層性については、拒否不安と同調志向との間にそれぞれ正の相関がみられた (それぞれ $r=.40, p<.001$; $r=.32, p<.001$)。階層性の高いグループに所属している人ほど、拒否不安や同調志向の高い関わりをしていることがわかった。親和性については、評価懸念、信頼安心、同調志向との間に正の相関がみられた (それぞれ $r=.22, p<.01$; $r=.69, p<.001$; $r=.28, p<.001$)。グループ内での親和性が高いと、評価懸念、信頼安心、同調志向の高い関わりをすることが示された。

4. 考察

本研究では、子育て期におけるママ友グループがどのような特徴のママ友関係を形成し、どのような関わり方をしているのかを検討した。

(1) 個人属性について

現代の日本の家族は、少子化や核家族化がその特徴として挙げられているが、今回の調査の対象者も、子どもの数や家族形態、職業などから、日本の平均的な特徴をもつ家族形態を形成していることがわかった。日本におけるママ友関係の特徴を検討するにあたり、きわめて一般的な調査対象者であったといえよう。

(2) ママ友について

ママ友の数についても、先行研究とそれほど違いはみられず、一般的な数値が得られたといえる。しかしながら、これまで数多くのママ友研究がなされてきているものの、いまだその定義が曖昧なものであることが問題点となっている¹³⁾。たとえば頻繁に連絡を取り合って互いが「親しくしている」と認識している場合と挨拶程度の関係の場合など、ママ友との関係にはさまざまな関わり方があることや、子どもを産む前から知り合いであったかどうかなど、定義として含める範囲をどのようにするかによって、同一人物であってもママ友としてカウントされるか否かに違いが生じることになる。今回の研究での定義は「互いに育児に関わっている同性友人関係をさす、母親同士の感情だけで友人関係の強弱を規定できるものではなく、母親とペアで関係を構築している子ども同士の存在を介した間接的なもの。ただし子どもを産む以前に出会い、仲間となった者も含まれる」としたが、この定義によっていわゆる「ママ友」が説明できているのかについても今後再考の余地があるといえよう。

ママ友関係の始まりについては、産院、保育所、習い事、子育てサークルなど、出産時や子育て期にしばしば足を運ぶ場所において顔見知りになったことが契機となっていた。一般的な友人関係の形成と同様に、共通の場を通して顔見知りになり、繰り返し会うことで徐々に親しくなっていく単純接触効果¹⁹⁾の影響がうかがわれる。今回の調査用紙内に設けた自由記述の中には、子どもの幼稚園や習い事、公園等の遊び場で出会い、子ども同士が長時間一緒に遊んだことがきっかけであるとした上で、「子どもが遊び終わるまでの時間子育て等について話し、子どもも親もまた次回も会いたいと感じた時連絡先を交換し合い、『ママ友』のきっかけがうまれたと考える」(ID 136) というものがみられた。出産や子育ての中で、喜びや悩みを共有しつつ、徐々に自己開示しながら関係を形成・維持させていく様相は、一般的な対人関係の親密化過程と相違ないものであるように思われた。

また、子ども抜きでママ友と外出する機会があるかどうかについては、ほとんどの項目でそういった機会がほとんどないという回答が得られた。今回の調査の調査協力者の第一子の平均年齢から考えると、身の回りの世話を含め、一般的にまだ子育てに手がかかるとされる段階であり、母親が自分自身の楽しみのために子どもを置いて出かけることは難しい状況であることが読み取れた。育児不安などの問題がクローズアップされている昨今、母親が子育てから離れ、一個人としてリフレッシュできるような機会も必要とされているように思われる。

(3) ママ友グループの特徴とその関わり方

ママ友関係の特徴として、まずは個人属性を変数として捉え検討した。その結果、子どもの数やママ友の数が多きほど、信頼安心が高かった。また、有意傾向ではあるものの、第一子の年齢が高いほど信頼安心が高かった。今回の調査データをあらためて分析すると、子どもの数とママ友の人数とは正の相関がみられていた。二人め、三人めと子どもを出産し、育てる子どもの数が増えることにより、ママ友関係が形成される機会そのものも増えることになる。そのため、自然とママ友の人数も増えるのであろう。また、子育て期においてママ友と関わっていくうちに、徐々に気の合うママ友を見つけたり、適切な距離感を保って関わっていくことを学習したりしてネットワークを広げていくとも考えられよう。一個人がママ友関係を形成、維持させていく中で、どの段階で、なおかつどのような状況で信頼安心を認識するのか、検討する余地があるのかもしれない。

ママ友グループの特徴とその関わり方との関連についてはママ友の特徴尺度の下位因子ごとに考察する。

閉鎖性については、閉鎖性が高いグループであるほど、拒否不安や同調志向の高い関わり方を行っていることが示された。他のグループとの壁が厚く、グループ内のメンバー以外を受け付けない閉鎖的な雰囲気があるグループほど、グループのメンバーから嫌われないように気を遣い、同調しながら関わっていることがわかった。また、閉鎖性が高いグループほど信頼安心が低かったことから、メンバーに自分のありのままをみせず、顔色をうかがいながら関わっているといえよう。黒川（2006）においても、友人グループに所属すると、グループの境界に壁を作ってしまう、グループ間の移動を困難にさせているということが指摘されており、グループにこだわらない開かれた関係を作ることの重要さが述べられている²⁰⁾。ママ友関係においても、閉鎖性の高いグループであるがゆえに他のグループへ移動することも難しく、ママ友グループとの関わりの中でストレスフルになりやすい可能性が考えられよう。

階層性については、階層性の高いグループに所属している人ほど、拒否不安や同調志向の高い関わり方をしていることがわかった。グループ内にメンバーを引っ張っていくリーダーが存在しているため、リーダーに拒否されることは、当該グループでの居場所を失う可能性がある。そういった事態を避けるため、グループのメンバーに同調して過ごしている様子うかがわれる。青年期における友人関係の研究においては、青年期前期よりも後期のほうが、友人グループのメンバーに気を遣わず、自分の意見が臆せずと言えるような関わり方をしており、発達的な変化がみられていた²¹⁾。しかしながらママ友関係は、通常の友人関係とは異なり、子どもの存在も同時に認識されたものとなるため、母親同士の価値観や考え方が合うかどうかだけでその関係が構築できるわけではない。そのため、自分の価値観や考え方と合うかどうかとは関係なく、メンバーに嫌われないよう同調しながら関わっていくことになるのであろう。

親和性については、グループ内での親和性が高いと、評価懸念、信頼安心、同調志向の高い関わりをすることが示された。グループのメンバー間の仲がよく、遠慮することなく何でも言い合える雰囲気の中で、無理に合わせるという消極的な同調ではなく、むしろ楽しみながら積極的に同調して過ごしているのかもしれない。また、仲がよいからこそ、その関係を維持させたいがためにグループのメンバーからどのように思われているのか気になり、嫌われないようにふるまうのだとも考えられる。

本研究においてママ友グループの特徴として3つの分類が見出されたが、その1つ1つにおいて、異なった関わり方が見出された。現代の子育ては手探り状態で始まり、十分な助言が得られるような親類が身近にはいない環境で行われており、それがゆえに育児不安などの問題が

挙がってきている。また共働き家庭も増え、時間のない中での子育てが繰り返され、ゆったりと安心して子育てができる環境はなかなか得られにくいことが推測される。今後は、ママ友関係におけるサポートやストレスがママ友グループの特徴によって違いがみられるのかについて、質問紙調査だけでなく面接調査も実施する中で徐々に明らかにしていく必要がある。

付 記

本論文は、日本社会心理学会第56回大会（2015年、東京女子大学）にて発表した内容を加筆・修正したものである。また、調査に協力して下さった子育て期のお母様方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 金子一史：育児不安および育児ストレスに関する最近の研究動向—周産期医療をとりまく環境とメンタルヘルス—、*周産期医学*、38（5）、591-595（2008）
- 名古屋市ホームページ：<http://www.city.nagoya.jp/kurashi/category/8-5-11-5-2-0-0-0-0.html>
- 工藤遙：都市の子育てをめぐるサポートシステム、*現代社会学研究*、26、55-71（2013）
- 河村真理子：LINEのトラブル—幼稚園児のママ友の世界—、*児童心理*、70（11）、847-851（2016）
- 長沼恭子・落合良行：同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係、*青年心理学研究*、10、35-47（1998）
- 三島浩路：小学生の仲間集団と学級適応—仲間集団の排他性と学級雰囲気との関連—、*応用心理学研究*、38（2）、114-121（2012）
- 黒川雅幸・三島浩路・大西彩子・本庄勝・吉武久美・吉田俊和：高校生におけるネット上の関係と友人関係適応感との関連、*東海心理学研究*、9、11-19（2015）
- 千鳥雄太・村上達也：友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応—中学生と大学生の比較—、*教育心理学研究*、64（1）、1-12（2016）
- 吉原寛・藤生英行：高校生の友人グループが主観的学校ストレスとストレス反応に及ぼす影響—性差を踏まえた検討—、*学校心理学研究*、12（1）、15-27（2012）
- 宮木由貴子：「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割—ケータイ・メール・インターネットが展開する新しい関係—、*ライフデザインレポート*、159、4-15（2004）
- 實川慎子：子育て期の母親の友人ネットワークの変遷—母親の捉える「知り合い」と「友だち」に注目して—、*乳幼児教育学研究*、19、37-47（2000）
- 本山ちさと：公園デビュー—母たちのオキテ—、*DHC*（1995）
- 大嶽さと子：「ママ友」関係に関する研究の概観、*名古屋女子大学紀要（家政・自然編、人文・社会編）*、60、37-43（2014）
- 石田靖彦・丹村明寿香：中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが学校における規範意識と逸脱行為に及ぼす影響、*愛知教育大学研究報告（教育科学編）*、61、117-125（2012）
- 内閣府男女共同参画局ホームページ：
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h27/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-02-09.html
- 厚生労働省：平成27年国民生活基礎調査の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa15/index.html>
- 中尾達馬・原田有紀：育児中の母親だけが経験する特異的な人間関係（ママ友関係）の諸特徴、*日本教育心理学会第52回大会発表論文集*、480（2010）
- 石田靖彦・小島文：中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連—仲間集団の形成・所属動機という観点から—、*愛知教育大学研究報告（教育科学編）*、58、107-113（2009）
- Zajonc, R. B. : Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology (Monograph Suppl., Pt.2)*, 1-29（1968）

- 20) 黒川雅幸：仲間集団外成員とのかかわりが級友適応へ及ぼす影響、カウンセリング研究、39、192-201（2006）
- 21) 大嶽さと子・多川則子・吉田俊和：青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達的变化：面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み、対人社会心理学研究、10、179-185（2010）

